

総合人間科の外部評価について

—外から眺める「総合人間科」の意義とは—

丸 山 豊

【抄録】 2002年より中、2003年より高へ導入される「総合学習」についての論議が盛んである。本校の「総合人間科」の授業を見学した大学生、公立高校教員、共に研究を進めてきた教育学部の研究者の外部評価を紹介するものである。

総合学習は期待が大きい反面、現場に混乱をもたらすかもしれない。スムーズな導入にあたって、客観的データと同時にさまざまな立場の生の声が参考になる。本論はこうした第三者の評価をまとめたものである。

【キーワード】 大学生のみた総合人間科 公立高教師のみた総合人間科 研究者の評価

1. はじめに

本校は1995年度から3年間にわたって研究開発学校として、「中高における総合的学習のカリキュラム開発」について実践研究続けてきた。ここで取り組んだ新教科「総合人間科」は、従来の総合学習の範疇を超えて「現代の課題と社会のあり方」を自分の生き方と重ねることで「人生選択」を柱においた教科として全国的にも注目を浴びている。特に高等学校における「総合学習」のあり方を理論と実践を統一し提示した点が高く評価された。

総合人間科の教科論、教科経営論、学習方法論、カリキュラム評価については本紀要の報告にゆずるとして、ここでは外部から総合人間科がどう評価されているかを述べることにする。

2. 大学生が見た「総合人間科」—福井大学と名古屋大学の学生たち—

総合人間科の授業は常に公開され、名古屋大学の学生をはじめ多くの学生が見学にきた。その中で、福井大学の教育学部と名古屋大学教育学部の学生の外部評価はどのようなものであったか考えていく。

(1) 福井大学教育学部の学生からの質問

1998年1月下旬、同大学の3年生の研究グループから手紙と共に質問状が届いた。彼らは社会教育法の講義(安藤輝次教官担当)で総合学習について実践研究を学ぶ中で本校の「総合人間科」に着目し、筆者宛に次のような質問を送ってきた。(以下原文のまま)

(1) 総合人間科の取り組みによって他の教科指導

にどのような影響がでていますか。

- (2) 総合人間科の授業をすすめていく際に、特別な準備が必要になりますか。
- (3) 総合人間科の活動をすることによって、大学受験への弊害は生じませんか。
- (4) 総合人間科のような取り組みが他の学校でも導入すべきだと思いますか。
- (5) 1997年11月21日の研究発表会のシンポジウムレジュメには、貴校は「生き方を探る」「生命と環境「平和を学ぶ」の3つを学習しているとあります。それらのテーマは、社会科が他の教科よりも総合学習と関連があるように思いますが、いかがでしょうか。
- (6) 総合的学習と既存教科の関係はどうあるべきなのでしょうか。

この質問には全国的な総合学習を研究しその問題点を把握しようと努力していることがうかがわれる。また、質問に続けて彼らの総合学習にたいする認識の変化を次のように書いている。

……私たちは、これまで次のようなことを学んできました。まず、私たちは戦後から現在に至るまで社会がどのように変化してきたかを知るために昭和20年代から60年代に行われた社会科の実践について調べてきました。そして、昭和20年代に行われていたコア、カリキュラムの考え方と「総合学習」の考え方は、共通しているように、昭和20年代の実践を中心に学んできました。いろいろな実践を調べた結果、総合的な学習の課題は、生命、環境、平和等の世界的、地球的な問題について考えていくことであり、昭和20年代の社会科を中心として授業を進めていくコア、カリキュラムとは全く別の考え方の異なるも

のであることがわかりました。……

この指摘は重要である。昨今「総合学習」という名の下、単なる活動主義、経験・体験主義がまかり通ってしまいそうな実践があふれている中、なぜ総合なのかを彼らなりに考えて結論づけているからである。社会科と総合学習の関係についても次のように指摘する。

……次に私たちの現段階での社会科と総合的な学習との関係について述べたいと思います。社会科を含めた既存教科と総合的な学習は、ともに自立して生きるために必要な力を養うことを目標にしている点で目指すべき方向は同じと考えられます。しかし、今日の学校教育では、既存教科は主に知識を詰め込むといった暗記科目になっているような気がします。そのため、自分が興味・関心を持った分野に知識を生かしていくことができません。一方、総合的な学習では、生徒たちの関心に合わせて現代社会における様々な事柄について、教科にとらわれず追求していくことができます。既存教科は、そのような事柄に関心を持たせる窓口の役割を果たすものであると思います。特に社会科は、あらゆる方面から自分、他人の存在、現代社会について理解していく教科なので、他の教科よりも総合的な学習と密接な関係があると思っています。私たちは、この問題について現在検討している途中です。……

総合学習の本質的な問題である。既存教科の基礎・基本が総合学習への問題関心を高めていくのか、総合学習が既存教科を深めていく動機付けになるのかという問題だ。学生としてはもっともな疑問である。

また、本校の研究に感銘を受けたとして、修学旅行と高校3年生の取り組み「生き方を探る」について次のような感想を寄せている。

一有意義な沖縄修学旅行一

……私たちが経験した修学旅行は、何かを学習するといったことはなく、単なる観光旅行で終わったような気がします。しかし、貴校の生徒たちは、「観光のない沖縄旅行に抵抗感を感じていた。」と言っていますが、最後には、「沖縄での住民の話や戦争の跡として残っている施設を見ることで、観光ではできない貴重な旅行となったようだ。」(『中・高「総合的学習」のカリキュラムの開発』)で言われています。高校生の感性で体験すべきこと、高校生のうちにしかできないこともあるのだと思いました。……

一高3の「生き方を学ぶ」に共鳴一

……自分の進路を決めるために、自分で大学を訪問したり、将来の夢を他人の前で発表しています。そ

のような機会が設けられていると、他人の意見を聞き、自分の生き方を考えることができるのでとても良いことだと思いました。また、高校生で自分のやりたいことを明確に持っていることがうらやましく思いました。貴校の総合人間科の実践より、「生きる力」とは、自分で自分の進路を決めて自分の人生を歩んでいく力ではないかと考えられました。……

彼らは大学生になった今、やっと生き方を模索し始めている。だから高校時代にこのような学習にあこがれうらやましく感じるのだろう。しかし、大学受験の最中にある高校3年生にとって彼らのような実感は難しいのも事実なのである。

(2) 質問への回答

これに対する筆者の回答は次の通りである。

前略

お手紙拝見しました。教育学部の学生として真摯に学んでいる様子に感激しました。

さて、総合学習については、教科横断的学習と総合的学習と総合学習の3段階のプロセスがあると思います。例えば、国語で詩を書かせる、それを英訳する、美術の時間に絵を描かせていても総合学習とはいえません。単なる教科のつまみ食いです。そこに一つの共通テーマを持たせていくと教科横断的学習になります。次に複数の教科が合体して一つの学習を作り出す段階があります。これを合科といいます。たとえば、「世界を学ぶ」という新教科として社会科、国語、音楽、技術の教師がプロジェクトをつくり、諸外国の文化を様々な面から学習し、表現し発信するというものです。これは総合的学習といえます。あくまで【的】がつくわけですね。しかし、この教科横断的学習、総合的学習もクロスカリキュラム、合科の必然性に欠けます。総合とは、なぜ総合でなければならないのかについての説得力がありません。中学校と高校における総合の在り方は明確に小学校と分ける必要があります。生活科に毛の生えたような単なる活動主義、体験主義に陥っては、戦後のコアカリキュラムの二の舞になり子どもたちはただはい回るだけになってしまいます。生徒たちに総合の必然性が学習活動からも感じられないからです。

質問が6つほどありましたね。

質問(1) 総合人間科の取り組みによって他の教科指導にどのような影響が出ていますか。

まず(1)の他の教科指導への影響についてお答えします。本校の総合人間科は養護をふくめ全ての先生方が担当します。したがって各専門教科の中で還元されています。大きな変化は、日常の授業への反

省があります。高校の教師は特に黒板とチョークだけの教え込みスタイルから抜け出せません。学習観の転換を総合人間科で図っても自分の授業では踏み切れないと言うジレンマに苦しんでいます。

教師の生徒に対する見方、つまり生徒観が変化しています。教師はすぐに欠点を指摘し、注意、説教をしがちです。しかし、総合人間科で活躍した生徒を教科でも、生活指導でも良いところを指摘し、自信をとり戻させようとしています。生徒は教師を見る眼が厳しくなりました。総合人間科は教師の力量差がはっきり生徒にわかります。学ぶ内容は教師より生徒の方がより専門的になることはしばしばあります。教師が積極的にサポートしたりアドバイスしないとそっぽを向かれる恐れすらあります。しかし、このような取り組みによって生徒と教師の対話があるいろいろな面で生まれています。

質問(2) 総合人間科の授業をすすめていく際に、特別な準備が必要になりますか。

結論から言いましょう。かなり、疲れるくらいの準備がいます。参考図書、文献、資料の紹介ができるか、地域の専門家とコンタクトをとれるような力をもっているか、生徒の学習内容の問題点を指摘しその方向性を示すことができるか。など教師自身の総合性が試されるからです。しかし、こわがることはありません。生徒と共に学ぶという姿勢がもっとも大事で、教えてやろう等という態度では高校生は反発します。時には生徒か「先生この本読んでみて、」とか「このVTRを是非」などと薦めてくれます。教師の前向きな取り組み姿勢がこの教科の全てです。

質問(3) 総合人間科の活動をすることによって、大学受験への弊害は生じませんか

「大学受験への弊害」という質問の用語にひっかかりを感じます。受験知とは何かを吟味する必要があります。総合人間科のねらいの一つに「学びの意義」を生徒自身が自分でつかみ取っていくことがあげられます。なぜ学ぶのかをつかめるなら受験知は自力でクリアーできるはずです。一年多くかかっても無駄ではありません。しかし、偏差値が高い生徒ほど、「こんな勉強(総合人間科)をしていては大学は受からない」、偏差値も平均以下だが一生懸命やっている生徒にとっては「大学の受験科目でこの教科が評価されたらなあ」とつぶやいています。

質問(4) 総合人間科のような取り組みが他の学校でも導入すべきだと思いますか

質問(5) 1997年11月21日の研究発表会のシンポジウムレジュメには、貴校は「生き方を探る」「生命と環境」「平和を学ぶ」の3つを学習しているとあります。それらのテーマは、社会科が他の教科よりも

総合学習と関連があるように思いますが、いかがでしょうか。

ご承知のように2002年から全国の中、2003年から高でも実施されることが決定しました。ただ、上からやらされる総合では必ず失敗します。例えば総合という名称の補習時間になったり、特定の個人に任せてたは知らん顔というパターン、または何を学校のテーマに据えたらよいか判断できずオール環境教育になるというような問題です。環境教育といえは聞こえがいいですが、その実はみんなでゴミを出さないようにしましよという徳目的な道徳主義の押しつけになる恐れすらあるわけです。だれのための何のための環境教育なのか、国際理解教育なのかを見極める眼を将来教師を目指すあなた方学生に学んでほしいのです。

「平和を学ぶ」の平和の概念を考えてみましょう。戦争に対する平和は狭義の概念です。平和に生きるとは、人間、自然が共生できる社会を目指すことですね。障害者の問題、介護、異文化、つまり異質な他者との共生です。これは社会科という枠でとらえてはいけないと思います。体育科から考えると平和とは、養護教諭として考える平和とは、数学から考えたらという広がりこそ重要です。

質問(6) 総合的学習と既存教科の関係はどうあるべきなのでしょう。

質問(5)を参考にして下さい。現代の課題は現教科の枠を完全に超えています。だからこそ総合たりのうのです。これを教室から飛び出し、自ら学習していく中で、すばらしい生き方に出会う。この問題解決の中から「生きる力」が生まれてくるのです。

今まで学んだことを各教科の「学校知」があつてこそ、生徒の中で「総合化」され総合的思考力が形成されると断定はできません。そうなると、基礎・基本もできていない生徒に「総合学習」など困難を極めるといふ批判が必ず出てきます。確かにそういう面を否定するものではありませんが、生徒の基礎基本のレベルに関わり無く「総合学習」は可能です。これを学ぶことで教科の学ぶ意義に気づく、または自分の基礎力のなさに気づくことも多いものです。つまり教科の動機づけになるのです。学びの楽しさ、またつらさを互いに学び合いつつ、自分の人生を選択していくここが大事です。

しかし、このような学びは「総合学習」の時だけで普段の教科は相変わらず詰め込みとしたら生徒にとって悲劇です。21世紀の学校はどの教科も総合化していくべきかもしれません。生徒の学校離れ、学校の相対的地位の低下にどう教育を創造していくの

か問われています。

じっくりと時間をかけ丁寧に学なら「わかる楽しさ」を体験していくでしょう。

誤った「個性尊重」のかけ声は、数学ができないのも個性だというへんな理屈を子どもたちに植え付けてしまいました。総合学習は、教育とは何かの根本的な問を投げかけています。(1998.2.6)

(3) 名古屋大学の学生が見た「総合人間科」とは

名大教育学部心理学科の3年生が教育心理学演習(速水敏彦教授)の講義の一環として「総合人間科」の授業を見学した。(1997.11.21)そのレポートから学生たちが総合人間科をどう評価しているのか探ってみよう。

見学者は16名、授業は中1から高3までの全学年にわたる。レポートはいずれも2000~4000字に及び、観察、考察ともそれぞれの自分が過ごした高校時代が反映されていておもしろい。福井大学のように本校の総合人間科を教科論として系統的、理論的に学んではいないため、一面的な捉え方、感想になっている場合も多く内容は少し異なる。

以下、「総合人間科が求める学力」「生徒の立場から」「大学入試との関わり」「教師の問題」「総合学習のあり方」などの観点から大雑把ではあるが分析してみる。

①総合人間科の求める学力について

- 他者と共に生きる社会的な力、人間力
- 知識量では測りきれない何かを育むもの
- 社会を変化させていく力
- 未来へつなげる力

②生徒の立場としてみた総合人間科

- 苦痛の体験になることもあるがとても重要
- 時間も集中力も必要とする科目であるためかなり負担を感じるだろう。その負担以上の価値を生徒が個々人に見出すことが出来るかが分かれ目
- 義務づけられたり無理強いになるかもしれない
- 自分の高校時代を振り返ると、このような問題意識が持てたか自信がない
- 問題意識が低い、やらされると感ずる生徒も大学に入ってから、様々なことを感ずるかもしれない
- 長い目で考えると数学や英語の授業などより必ず役立つ
- 自分の高校時代にもこうした科目があったらな、とうらやましく感じた。
- とてもおもしろい。自分がもう一度中学生、高校生に戻れるならば是非受けてみたい。

③大学入試との関わり

- 大学入試に対する位置づけを明確にして取り組むべき
- 学校の勉強のほとんどが受動的な受験勉強になっているのに対し、総合人間科のような自発的な学習は本来望ましいものであるが、全国的に受け入れてもらえるのか
- この試みがある種受験という学校の持つ現実から、かけ離れたところで行われている気がする。
- 受験科目に関係ない、大学側が考慮してくれないと言った理由から「総合人間科」に反対する気持ちも分からないではない。
- 「総合人間科」という画期的な試みの未来を左右するのは、大学のあり方に対する、大学人や文部省の思い切った改革・刷新に託されていると思う。

④教師の問題として

- 教師は、生徒の主体性が育成されるような学習の進め方の習得のための訓練や、生徒主導的教育観を身につけることが重要。さらに教える教師の側の人間的成長、成熟が重要なのではないだろうか。すなわち、生徒が人間的・人格的に成長していくには、教師が生徒一人一人の個性の違いを受容できるだけの成熟さを持ち、また自らも自己実現に向けて成長していこうという意識を常に持っていることが重要。

⑤総合学習のあり方

- 生徒がどの程度自主的に取り組んでいるのか。それぞれの生徒が問題意識をもって取り組めば、得るものは大きいであろう。しかし、自分が中学生、高校生だったときにそういった意識を持てたか考えると自信がない。けれどもはじめはある程度義務的に、その場に取り組んでいたとしてもその過程でいろいろなことを感じたり気づいたりして、生徒の姿勢が変わっていけば、それはまさにこの教科の成果といえるのではないだろうか。また、実際に取り組んでいる中学、高校の間は何にも感じなくても、大学等に入ってから様々なことを感じるかもしれない。私はそれでも十分だと思う。この総合人間科を通して感じたこと考えたこと、身につけた力を今後どうつなげていくかがポイントである。
- また、この教科は他の教科以上に生徒次第で良い授業にも悪い授業にもなりうる。ここで、教師が先頭に立って必死に引っ張っていくのではなく、教師としては生徒が考えたり取り組んだりするためのきっかけをどれだけ与えてやれるかということが大切ではないだろうか。

教室の中で教えられるだけでなく、自分で考える時間が持てるということは人として生きていく上で非常にプラスになるのではないか。

(3) 大学生の視点と評価のまとめ

大学生の「総合人間科」に対する評価は概ね好評である。知的関心や問題意識のレベルが高校生に比べて格段と違いがあるからともいえる。

大学入試との関わりでは、大学生も高校教育に受験サポートを期待しているようだ。大学入試にとって「総合人間科」は役に立つのか、の問いかけに受験戦争を勝ち抜いた現役大学生は否定的であっても仕方ないだろう。大学入試の改革なしではこうした「総合学習」はありえないのだろうか。今後普通科高校での導入で最も論議が起こるところである。

教師の役割についての関心も高い。教師はサポーター、オブザーバー、に徹するべきとの感想が多い。本校の高2、3の生徒の意識と同様である。高校生は教師の口出しを否定する傾向も強い。大学生は教師の役割について、見守ることができる教師の力量と人間性をあげているのは興味深い。いずれにせよ教師の専門性の質が「総合人間科」では従来と全く違う「教師自身総合性」「知的関心」「ネットワーク」などの新しい質に転換していることを見抜いている点を高く評価したい。

3. 公立高校の教師がみた「総合人間科」

(岐阜県立恵那高校、前川泰信先生)

高校3年生の「パネルディスカッション」の授業見学のレポート(感想)が筆者に送られてきた。公立高校の教師たちはどのようにこの授業を眺めていたのか。そのレポートの概要を紹介したい。

(1) 前川レポートよりー以下引用ー

去る11月21日(金)に、研修部の三人の先生と一緒に、標記の研究発表を参観してきました。以下にその様子をお伝えし、感想を述べたいと思います。

当日は各会場で中1～高3までの発表が行われましたが、私が参観したのは体育館を使用して実施された、高校三年生の発表「生き方を探る～My Life 未来を語る～」と題されたものです。とにかく圧倒される内容でした。この高校は各学年3クラスの小さな編成となっています。現三年生はこれまで三年間「総合人間科」で学んできた訳ですが、その総決算としてこの発表会はもたれました。その内容は、年度当初にそれぞれの進路志望ごとに大きくグループとなって、それぞれが土曜の3・4時間目を利用

して自分の専門分野に関する問題について、研究・討論を重ねてきた結果を、グループの代表者がパネリストとなって発表、あとはそれについて討論がなされるといったものです。

グループは全部で七つあり、「人文科学の分野に進む者」「芸術・体育の分野に進む者」「工学系に進む者」「理学・農学・家政学に進む者」「社会学、特に福祉関係に進む者」「医療関係に進む者」「教育・心理学関係に進む者」に別れています。

以下、その様子を実況中継してみましよう。

まず、パネリストの発表はこんな具合です。

.....

人文科学の代表は、歴史学に進もうとしているW君です。彼の述べたのはこんな内容でした。

「自分が歴史に志すようになったのは、同じく歴史を研究している父が幼い頃から自分を遺跡や博物館などに連れていってくれたことが素地となっている。しかし、自分の進路として歴史を考えるきっかけになったのは、シュリーマンの『古代への情熱』と漫画『マスターキートン』を読んだことだった。そこに語られているのは、授業で語られる年号と事柄の羅列に終始する歴史ではなく、その事柄がなぜ起こったのか、それによって社会はどうなったのかといった大きな流れを究めようとする学問であった。すなわち歴史は過去の研究から、未来の自分たちがどう生きるべきかを探る学問である。人類の将来の選択の方向性を示唆する学問としての歴史を自分は追求していきたい。」

芸術では、クラシック音楽の世界に進もうとするTさんがこんな発表をしました。

「自由な国と言われる日本において、クラシックの世界は大変に封建的である。これからそれについて述べたい。本来実力の世界である音楽界は実は大変な縦社会である。大学の先生のコンサートのチケットを生徒が売りさばくのは当たり前、オペラの配役は実力よりもこの大学の出身で、どの先生についているかが重視されて決まる。この不条理きわまりない実態を知って自分は大変驚いた。その世界で生き残るために上の者に媚びを売る、これはいかにもおかしいのではないか。しかし、翻って自分の進学希望を考えると、自分がそこを志望するのは、やはりその大学に入り、学閥に所属し、ハクがほしいからにほかならない。それを思うと、めざす道のために努力することはそのまま学歴社会にはまることなのだと思う。しかし、自分はこの悪しき習慣の打破を目指していきたい。」

.....

これらの発言は、ここにまとめようとして特に言葉を難しくしているのではありません。内容もさることながら、彼らの語る言葉の正確さ、語彙の豊富さ、人の話を聞き取る能力、聞いたことをきちんと踏まえて意見を述べる力、そうした音声言語の能力の高さに驚かされました。それなりの家庭に育っているからなのだとはいえそれまでですが、最終的に自分の学んだことを表現できる力の大切さをまざまざと見せつけられた思いでしたし、いわゆる「クロス・カリキュラム」的な考え方から教育課程を検討する場合、国語という教科の果たすべき役割にも大きな示唆を与えられました。次に討論の様子を二つ紹介しましょう。

.....

バイオテクノロジーに進もうとしているA君は、「クローン動物のニュースによって、動物実験のことがまた話題になっている。一般に動物実験については肯定的な人が多いと聞いて驚いている。自分の親は実験動物に関わっているの、自分には抵抗がない。文系の人や抵抗感のある人に意見を聞きたい」と問いかけました。それに対して、

「動物が人間の犠牲になるのはおかしい。科学者は動物に対してなら何をしていてもいいと本気で思っているのか」という女子の意見が返されました。彼が、

「しかし、食用となるために生まれてくる動物はいくらでもいるのに。」と反論すると、

「それは食物連鎖の上で自然なこと。科学がなまじ発達したために人為的に殺すのは違う。」

それを受けて

「決して命を尊重しないと科学者は言うのではない。技術は人間社会をよくするためのもの。どうしても人に対して実験できないことを、動物に代わってやってもらうという気持ちは忘れない。」と彼はまとめました。

その後、司会者は自己の判断で賛否を問う挙手を求め、それを「参考にしてほしい」と彼へのはなむけにしました。

福祉に進もうとしているKさんの発表は、

「私が福祉に関わっていくと言った時、友人は一言『偽善者だね』と言った。自分の福祉観について述べることで、その友人にも答えたい。自分は二年生の時にボランティアに参加した。しかし後で考えるとそれは自己満足に過ぎないものだった。老人ホームで働いた時に、『人のためになりたい』という考えではだめなのだと悟った。そこで私が感じたものはそれまで感じたことのない自己の充実感であったし、新しい自分の発見であった。ボランティアはひ

とごととして考えるものでなく、まず参加してみることから始めなければならないものだ」という、我々であれば、大拍手で満点をあげたい内容でした。

それに対して、ずいぶん厳しい意見が飛び交うのです。

「自分のいとは障害者であるが、家族でさえ彼が社会的に自立する道があるかどうかについて、本当に苦しみ抜き、それでも答えが出せないでいる。家族でさえこれだけ苦しんでいるのに、他人のあなたが本当に障害者を支えることができるのか。彼が抱える障害は、あなたが関わっていない時間もずっと彼についてまわることを忘れてはいけない。安易な同情とか、自己の充実感などというのではなく、障害者が本当に何を求めているのかをよく考えてほしい。」

「自分もボランティアに参加したが、知的障害者の相手を一人でさせられて困った。『どうすればいいのか』と所員に尋ねると、『楽しく過ごしてくれればいい』という答えであった。しかし、本当にそれなのか疑問だ。我々はあまりにボランティアのことについて小中学校で学んでいない。自己満足に終わらないボランティアとはどんなものなのだろう?」

.....

痛感されるのは、別に教師が一から教えなくても、生徒は学べるのだということです。そもそも、彼らは一教師ではカバーしきれない様々な分野に進むのですから、我々が一人一人に有益なことを教えられると思うのが間違いなのでしょう。それならば、彼らが自分でそれを探求する時間を、一見無意味だと思われても、確保することの方が、彼らの将来には有意義な学習ができるということ、この討論は示しています。それも、一人学びを出発点にして、同じ時代に生きている若者同士が学び合い、影響し合うことで、高校教員などの及びもつかない高みへと達していく可能性があるようです。

最後のまとめで司会の生徒から「この総合人間科は受験科目にはないけれど」という一言が出ました。こんなことをやるくらいなら、単語の一つも覚えた方が…という発想はよく言われるところです。けれど、恵那高三年間でかけた授業時間の分だけ本当に何かを生徒が獲得しているか、と問い直したときに、こういう思い切った時間の使い方を考えても、思っているほど学力が落ちるということはないような気がするのですが。

(岐阜県立恵那高校 前川泰信先生の校内研修会レポートより)

(2) 前川レポートから見えてくるもの

前川レポートは高校教育の1つの方向を示している。第1に高校生の言語表現能力は機会が保証されれば高まるものであるという事実。本校は国語を通して科目「国語表現」(スピーチ)を高校3年生に取り入れている。たしかに言語能力は高まるかもしれない。しかし、スピーチの問題は単にスキルのな方法論に陥りやすいのも事実である。生徒の問題意識、追求する意欲、体験、解決方法まで指導することは、科目としての従来の「スピーチ」は不可能でさえある。しかし、生徒は「総合人間科」での学びを「プレゼンテーション」するとき、実に自信にあふれている。聞いている方も耳を傾ける。「自分も発言したい」(名大生の感想より)という衝動にかられる。テーマが今日的、現代の課題であるからこそ発言もしやすい。

第2に教師の役割の再認識である。教師が教え込まなくても「生徒は学べる」。当たり前なのだが、この認識が難しい。また、前川氏は教師の驕りの姿勢についても批判的だ。方向としては「教育課程の編成」に突き当たる。前川氏の指摘するように「思い切った時間の使い方」を現場一人一人の教師がどこまで受け入れ、踏み切れるか。また、クロスカリキュラムや合科としての「新しい教科構造」を積極的に生み出していけるかが今後の大きな課題であることを示唆している。

4. 研究者の指摘する課題—教育学部共同研究者の提言より—

研究開発にあたっては、各学年に名古屋大学教育学部の研究者を置き、組織的に研究を進めてきた。第三年次報告書に掲載された「総合人間科への提言」からその捉え方、視点、課題を考えてみたい。

- 「総合人間科」では学校で「対人関係」や「社会」のルールを教え、生徒の人間関係のルール形成に役立つ側面があることを指摘し、同時にこのような性格の教科は、教師の「対人関係能力」「社会関係能力」ついった新しい力量が求められる、としている。
- また、生徒の行動から「一つの“生命”が他の人や事象に触れていくことは、願ってもない現実体験を生徒にもたらした」とし、この教科が卒業生にどんな影響を与えたかを追跡する必要を強調された。
- 学力との関係では、従来のいわゆる「あたまの良さ」を受け入れている生徒の「自己規定」、学校、社会、から抜けだす新しい「21世紀の

学力論に構築」が必要だとし、その一つとし「学び方の能力」(失敗からも学ぶ態度)、「柔軟な対応行動の能力」(さまざまな対応方法を考察して、状況に応じて取捨選択する)を挙げている。

- 生徒と教師の関係では「これまでの教育活動をかなぐり捨て」て教師、生徒が共に学びあえる場としての「総合人間科」を「生徒たちと教師たちの自己学習運動」として高く評価された。
- 一方「総合人間科」は旧来の学校教育のパラダイム転換の試みであるのに関わらず、実践の成果が相殺されるような多くの学校文化が併存しており、新たな「脱学校文化」(=新学校文化の創造)を目指さないと「総合人間科」は矛盾する存在になるとまで指摘された。矛盾する存在ではいずれ生き残ることは難しい。
- この「学び」を今後も保障するためには「全職員が全生徒に責任を持つ」教育活動の展開にむけて「教育課程づくり」(教育活動の全体計画)こそ緊急な課題であるとの指摘ある。

これらの指摘を私たちがどこまで受け入れて、学校づくりの中から新しい学校文化を生み出すことができるか大きな岐路に立たされているといえる。

5. おわりに—「矛盾する存在」から「新たな教育課程づくりへ」—

「総合人間科はどのように役立つか」(速水敏彦、田畑治、吉田俊和1996名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—第44巻)によると総合人間科は「自分の考えをまとめたり、決定したり、調べていく」いわゆる問題解決能力を高めている教科であることが生徒の実態調査からもうかがわれる。また「発表、話す力、文章にまとめる」といった表現能力、コミュニケーション能力との関連も大きい。「将来の生き方の選択」といった生き方にも影響を与えていることもわかる。しかし、「主観的な意識」でありほんとうに「有益であったかどうかはより客観的な方法で検討される必要がある」(同論文)との指摘が「総合人間科」のカリキュラム評価にとって最も重要である。

「総合学習」は大変期待が大きいだけに、第三者としてもひいき目に評価したいところだ。つまり、「総合学習」の広がりによって教育の可能性を求めることになる。

しかし、今のままでの学校現場への導入は「矛盾

する存在」として「拒否反応」をおこすところがあるかもしれない。

学校教育の再生のために、総合学習は大きな役割を果たしていくことは研究開発実践校として実証済みだが、それを受け入れて「新しい学校文化」を築く意欲と自覚が何より教師自身に求められる。

参考文献

- ①安彦忠彦 名古屋大学教育学部
附属中学・高校『中・高「総合的学習」のカリキュラム開発』1997. 明治図書
- ②丸山豊 「総合学習」実践の成果と課題
『高校教育展望』1998. 2月号 (小学館)